

恒川遺跡群 白山遺跡

飯田市座光寺下段整備事業農道新設に先立つ
埋蔵文化財包藏地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市農林部
長野県飯田市教育委員会

恒川遺跡群 白山遺跡

飯田市座光寺下段整備事業農道新設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市農林部
長野県飯田市教育委員会

序

今回座光寺地区では、下段地帯の構造改善事業が行なわれることになり、関連する事業として農道の拡幅、新設があり、当遺跡も農道の新設にかかりました。

座光寺地区は、古代から文化の開けた土地であって、古墳や古代の各種の遺跡があります。発掘調査も早くから行なわれ、大正12年に座光寺小学校開校50周年に合わせて、畦地1号古墳の石室内調査で、銀製の『垂飾付長鎖式耳飾』等貴重な遺物が発見されていることは、皆様もご承知のことと思います。

又10年程前に、国道153号のバイパス新設で、発掘調査が行なわれ各種の発見があり、『伊那郡衙』が座光寺地区にあったのは、事実となりつつあり、確認する為の調査も、文化庁の補助を受け約10年続いております。

古代から開けた、座光寺地区にも開発の波は押し寄せ、バイパスぎわはいうに及ばず、天竜川の氾濫原である下段地帯もその例外ではありませんでした。

下段地帯の構造改善事業に関連し、農道が新設されることとなり、当該地が埋蔵文化財包蔵地白山遺跡の範囲内であり、発掘調査を実施し、記録として後世に伝るのが本書です。

この報告書にあります歴史の事実は、私達の遠い先祖の生活史であり、原点といつても過言ではないと思います。皆様のはるか古代を考える一助になれば幸いです。

終りに、調査実施にあたり様々なご協力をいただいた、関係者各位に心から感謝申し上げます。

平成4年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　　言

1. 本書は、飯田市座光寺下段整備事業・農道新設に伴う、埋蔵文化財包蔵地白山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、飯田市農林部の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 遺跡名「白山遺跡」に、略号「S R Y」を与え現地作業から、整備図面・遺物等にすべてこの略号を用い記録保存した。
4. 本書に掲載した図面類の整理・遺物実測は佐々木が行った。なお、整理作業実施にあたり整理作業員が補佐した。
5. 本書は佐々木嘉和・小林正春が執筆・編集を行い、小林が総括した。
6. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、各々の穴の周囲からの深さをcmで表わしている。
7. エレベーションの水平線に付した数字は、標高をmで表わしたものである。
8. 本書に掲載された石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕を実線で、刃つぶし及び敲打痕を破線で表した。
9. 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序	
例言	
目次	
I 経過	
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	1
II 遺跡の環境	
1. 自然環境	5
2. 歴史環境	5
III 調査結果	
1. 中世	
1) 溝址	
①溝址 1	9
②溝址 2	12
③溝址 3	12
④溝址 4	14
2) 穴等	
①B12P 1	14
②B13P 1	15
③D12P 1	15
④E 9 P 1	16
⑤F 9 P 1	16
⑥F11P 1	16
⑦F12P 1	16
⑧H 8 P 1	16
⑨J 9 P 1	16
3) 遺構外出土遺物	17
①弥生時代	17
②古墳時代	17
③平安時代	17

④中・近世	17
4) 時期不明遺構外遺物	18
①鉄製品・鉄滓・鉛滓	18
②石器	18
③金属製品	18

IV　まとめ

挿　図　目　次

挿図 1	調査遺跡及び周辺遺跡位置図	3
挿図 2	調査位置及び周辺地図	4
挿図 3	調査遺構全体図	8
挿図 4	溝址 1	10
挿図 5	溝址 2・穴	11
挿図 6	溝址 3・4	13
挿図 7	穴等	15

図 版 目 次

第1図	溝址1出土遺物	23
第2図	溝址2・3出土遺物	24
第3図	穴・遺構外出土遺物	25
第4図	遺構外出土遺物	26
第5図	遺構外出土石器	27
第6図	溝址1・2・遺構外出土遺物	28
第7図	溝址2・3・穴・遺構外出土石器	29
第8図	遺構外出土遺物	30

写 真 図 版 目 次

図版1	遺構全体	32
図版2	溝址1・2	33
図版3	溝址3・4・穴	34
図版4	遺物出土状態F11P1、遺構外、溝址1出土遺物	35
図版5	溝址1・2出土遺物	36
図版6	溝址3・穴出土遺物	37
図版7	穴・遺構外出土遺物	38
図版8	遺構外出土遺物	39
図版9	遺構外出土遺物	40
図版10	遺構外出土遺物	41
図版11	作業スナップ	42

経過

1. 調査に至るまでの経過

白山遺跡は、飯田市座光寺の中位段丘端に所在する。白山遺跡は、恒川遺跡群の一つであり、遺跡群の段丘東南端部に位置する。

昭和52年以来、一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査が実施され、多数の官衙的遺構・遺物が確認された。当該遺跡は、從前より古代伊那郡衙と推定されており、調査結果は強くこれを裏づけるものであった。

昭和57年度以後、国（文化庁）・県教育委員会の補助を受けて、飯田市教育委員会は範囲確認調査を継続実施しており、郡衙址の位置・規模・構成・変遷等諸問題を解明すべく成果を重ねている。

また、これと並行して、恒川遺跡群と周辺では、急速に進展する諸開発に先立ち、文化財保護の本旨からすれば次善の策ではあるが、緊急調査を実施し記録保存を図っている。

座光寺地区では、長年の懸案である、下段地帯の構造改善事業が本決まりになり、それに付随する道路の新設案が、飯田市農林部により示され、平成2年8月24日長野県教育委員会・飯田市教育委員会・飯田市農林部それぞれの担当者によりその保護策について現地協議を行なった。

その結果、土地耕作者の了解が得られた、11月から調査に着手することとなった。

2. 調査の経過

諸協議の結果に基づいて、平成2年11月8日発掘調査に着手した。試掘トレチを、柿の木の間に入れ、溝状遺構を確認したので、柿の木を移し全面発掘することになった。小型重機で移植と表土剥ぎを行ない、順次検出し遺構を掘り下げて精査し、写真撮影・測量を行なった。

その後、平成4年3月末まで飯田市考古資料館において、現地で記録・保存した遺物・図面・写真類等の整備作業を行ない、当報告書作成作業にあたった。

3. 調査組織

1) 調査団

調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和・佐合英治・吉川豊・馬場保之・渋谷恵美子

作業員 今村勝子・今村春一・片桐卓治・北村重実・小池金太郎・小池千津子・木下喜

代恵・向田一雄・佐々木啓・佐々木智子・沢柳敬介・吉川正実・豊橋宇一・福沢トシ子・古田八重子・細井光代・正木実重子・正木睦子

整理作業員 池田幸子・伊原恵子・大蔵祥子・金井照子・金子裕子・唐沢古千代・唐沢さかえ・川上みはる・木下早苗・木下玲子・榎原勝子・小池千津子・小平不二子・小林千枝・佐々木真奈美・田中恵子・筒井千恵子・榎本宣子・丹羽由美・萩原弘枝・林 勢紀子・原沢あゆみ・平栗陽子・福沢育子・福沢幸子・牧内喜久子・牧内とし子・牧内八代・松本恭子・三浦厚子・南井規子・宮内真理子・森 信子・森藤美和子・吉川紀美子・吉川悦子・吉沢まつ美・若林志満子

2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村 隆彦（社会教育課長 平成2年度）

安野 節（社会教育課長 平成3年度～）

中井 洋一（社会教育課文化係長）

小林 正春（社会教育課文化係）

吉川 豊（社会教育文化化係）

馬場 保之（社会教育課文化係）

渋谷恵美子（社会教育課文化係）

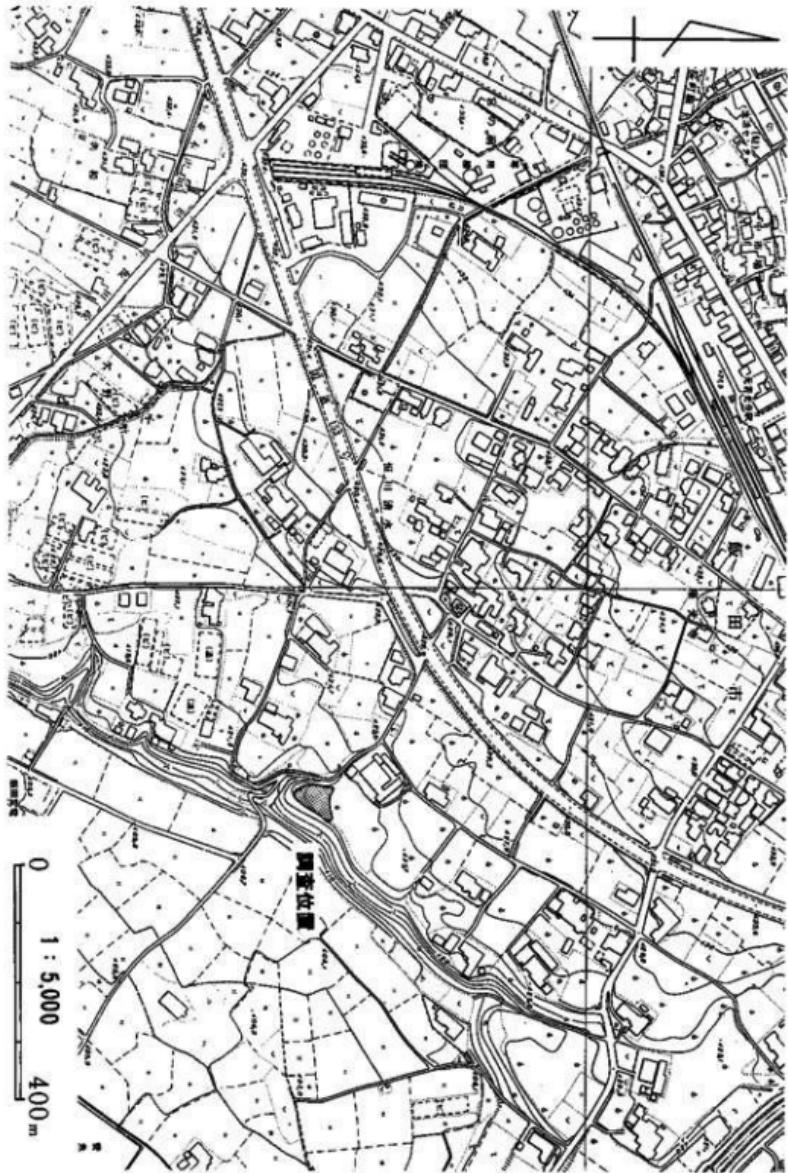
篠田 恵（社会教育課文化係）



1. 白山遺跡
 2. 座光寺原遺跡
 3. 宮崎A遺跡
 4. 宮崎B遺跡
 5. 大門原B遺跡
 6. 大門原D遺跡
 7. 大久保遺跡
 8. 中島遺跡
 9. 恒川遺跡群
 10. 石行遺跡
- A. 新井原12号古墳 B. 畦地1号古墳 C. 高岡古墳群 D. 新井原古墳群

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図

図2 検査位置及び周辺地図



II 遺跡の環境

1. 自然環境

白山遺跡は、飯田市座光寺恒川地籍に所在する。

飯田市座光寺地区は飯田市街地の北東4kmに位置し、南西を下伊那郡上郷町、北東を同高森町東南は天竜川を挟んで同喬木村に囲まれた、行政区画上飯田の飛地にある。

飯田市は南アルプスと中央アルプスに挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山地の間を天竜川が南流する。山地の形成に関わる断層運動に伴ない、盆地、大きな段丘が形成され、それを天竜川に流入する河川が切断し、複雑な段丘地形を呈している。座光寺地区は中央アルプスの前山から、天竜川に至り、継長の三角形に近い形をしている。断層で形成された段丘崖2段が横断し、大きく上・中・下段と分かれる。各段丘崖は小河川に切られ、中段には幾つかの小段丘があり、各崖下には湧水がある。

白山古墳は、中段の段丘端部にあり恒川遺跡群中の恒川清水東方約100mにあり、それを源とする小沢により南側が浸食された岬状の端部に位置する。北東はわずか低くなっている地続で段丘面に続く。小沢の横には市道があり、この市道を改修した道路が古墳の北側を通過するわけである。

2. 歴史環境

座光寺地区の埋蔵文化財包蔵地は20余りあり、地区内にある遺跡の時期別分布は、上段地帯に繩文、弥生時代の遺跡があり、山寄りに繩文時代の濃度が増している。中央の断丘崖下に古墳、上に中世山城が位置し、中段には繩文時代から近世の遺跡が複合して分布している。

地区内には古墳が多く、埋蔵文化財包蔵地も含めて土器・石器も出土し、住民に考古遺物に興味を持つ人も多い。記録が無いので、はっきりしないが江戸時代から明治時代にかけて古墳の遺物が取り出され、同時に削平桑園に変化した様子である。

次に地区内の埋蔵文化財・古墳等の調査を概観する。

発掘調査の最初は、大正11年11月に、現在の東日本鉄道飯田線にかかる調査された、新井原12号古墳（大塚）（注1）である。この頃鳥居龍藏氏による遺物調査が行なわれている。大正12年には畦地1号古墳の石室が、座光寺小学校職員と高等科生徒によって清掃調査され、銀製の「垂飾付長鎖式耳飾」が発見されている。その後、昭和30年代まで記録は無く破壊のみが進んでいたと思われる。

昭和37年（1962）年には、前年の梅雨前線による集中豪雨（36災）の災害復旧工事用採土に先立ち、下伊那教育会歴史調査部によって、上段の一部座光寺原遺跡（注2）が調査され、弥生時代

後期の標識「座光寺原式」が設立されている。

その後、いくつかの発掘調査が行なわれ、昭和45年には中央自動車道建設に伴う発掘調査で座光寺地区では宮崎、大門原など5遺跡（注3）が調査された。

昭和50（1975）年には、農業構造改善事業に伴う道路部分の調査で、中島遺跡（注4）が座光寺考古学研究会・下伊那教育会考古学委員会によって調査され、弥生時代後期標識「中島式」の設定の元となった。

昭和51（1976）年度からは、一般国道153号座光寺バイパス建設に伴う発掘調査が、当飯田市教育委員会によって行なわれた。その結果、恒川遺跡群（注5）は多岐にわたる遺跡の密集地であり、かつ、重要遺構、遺物の出土があり古代伊那郡の推定「郡衙」の一画として注目された。恒川遺跡群内に「郡衙」の確認を求めて、昭和57年度から、文化庁の補助を受けた恒川遺跡群確認調査が始まり、平成3年度で11年目に入った。まだ確認には至っていないが更に重要性は増している。

昭和60年（1985）飯田工業高校の移転新築に先だつ、調査が行なわれた石行遺跡（注7）の縄文時代早期から続く埋蔵文化財の姿が明確にされ、古墳も新井原2・4・5・15・16・17号古墳、高岡4号古墳が調査された。

昭和63（1988）年度には、それ以前のバイパス両側の開発に伴なう発掘調査の報告書が発刊（注8）され、バイパス調査の遺構の統きが明確にされた。

平成元年（1989）、飯田工業高校の移転新築に伴ない、市道の拡幅が行なわれて、高岡3・4号古墳（注9）の調査がされ、続いて平成2年（1990）に、高岡3・4号古墳から約30m東に離れた、新井原18号古墳（注10）が、飯田工業高校々友会館新築に伴なって調査された。

又、恒川遺跡群の一角新屋敷遺跡が、平成元年（1989）（注11）に開発に伴なって調査された。

以上の地区内における、埋蔵文化財の調査結果のいくつかを踏まえ、地区内の歴史上の変遷を記述すると次のようである。

当地区内において、最初の人々の足跡は、縄文時代早創期の有舌尖頭器の出土例によるが、更に古い旧石器時代から人の住んだ可能性が強い。また、縄文時代においては、その早期から晩期まで途切れることなく、各時代の遺物が、上段、中段の区別なく、ほぼ全城から発見され、伊那谷全体における座光寺の位置からみても中心的な役割をはたしていたと判断される。

続く、弥生時代においては、地域内において中心的な地であった姿がより明確にとらえられる。それは、弥生時代中期から後期にかけて、恒川式、座光寺原式、中島式と三つの標識遺跡が存在し、各期の大集落が展開したことで知られる。

古墳時代を代表する古墳を見ると、現存するものは10余りであるが、下伊那史には、古墳総数66基の記録がある。前方後円墳の高岡1号墳（県史跡）を盟主とする古墳が構築された事実や、その副葬品をはじめとする内容も傑出したものばかりであり、伊那谷の該期を代表する地区の一つとなっている。

続く、奈良・平安時代については、当地区が歴史上最も注視されるべき時代といえる。それは、先述した恒川遺跡における、古代伊那郡衙址の存在であり、定額寺院の寂光寺の存在である。この時代、伊那谷の政経の中心であったことはいうまでもなく、さらに、大和朝廷による国政遂行上でも欠くことのできない地であったといえる。

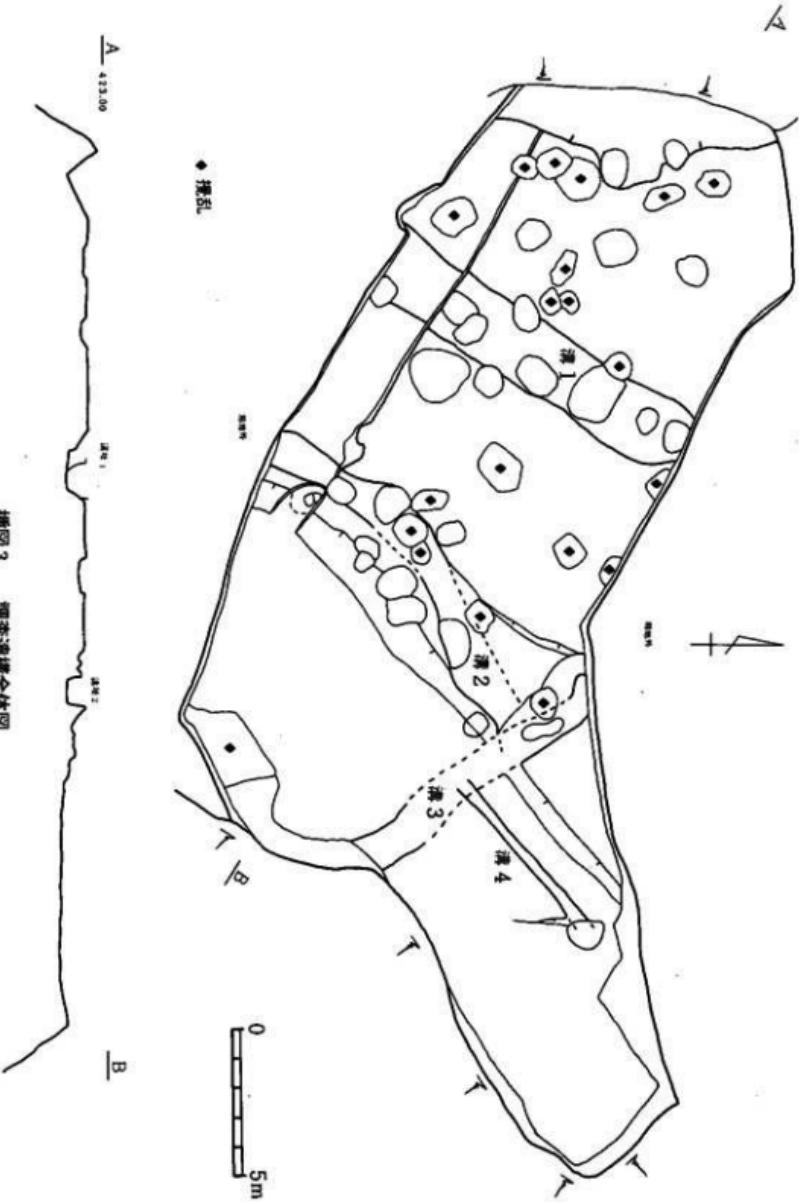
次時代の中世以降が、当地区の歴史資料の希薄な時代であり、南本城、北本城の二城があるにもかかわらず、具体的な歴史事実は未解明な状況である。しかし、各所で行なわれている埋蔵文化財の発掘調査において、輸入磁器を含む、他に例のないような優品の出土が多く、史実には登場しないまでも、当地域において重要な役割をはたしていた地区と推測される。

以上のように、各時代それぞれに重要な意味をもつ歴史背景の認められる地区の中に、本白山遺跡がある。そこは、段丘上端で古墳の所在地になっており、今回の調査で確認はできなかったが、弥生時代～中近世の遺物が出土した。

注

1. 市村咸人 1955 「下伊那史」第2巻 下伊那誌編纂会
2. 今村善興 1967 「飯田市座光寺原遺跡」『長野県考古学会誌』4
3. 長野県教育委員会 1970 「中央道調査報告－飯田地区」
4. 宮沢恒之 1967 「飯田市中島遺跡」『長野県考古学会誌』4
座光寺考古学研究研究会 1976 「飯田市座光寺中島遺跡の調査報告」『伊那』3
5. 飯田市教育委員会 1986 「恒川遺跡群」
6. 飯田市教育委員会 1982～1990 「恒川遺跡群範囲確認調査概報」
7. 飯田市教育委員会 報告書年度内刊行予定
8. 飯田市教育委員会 1988 「恒川遺跡（田中・倉垣外地籍）」
飯田市教育委員会 1991 「恒川遺跡（田中・倉垣外地籍）」
9. 飯田市教育委員会 1990 「高岡遺跡（高岡3・4号古墳）」
10. 飯田市教育委員会 1991 「高岡遺跡（新井原18号古墳）」
11. 飯田市教育委員会 1991 「恒川遺跡群・新屋敷遺跡」

図3 調査区域全体図



III 調査結果

白山遺跡の農道新設範囲を全面発掘し、住居址の発見は無かったが溝址・穴を検出し、時期は中世～近世である。表土から基盤までわずかで、耕作の為造成をされており、擾乱が著しい。

溝址	1～4
穴	多数

1. 中世

1) 溝址

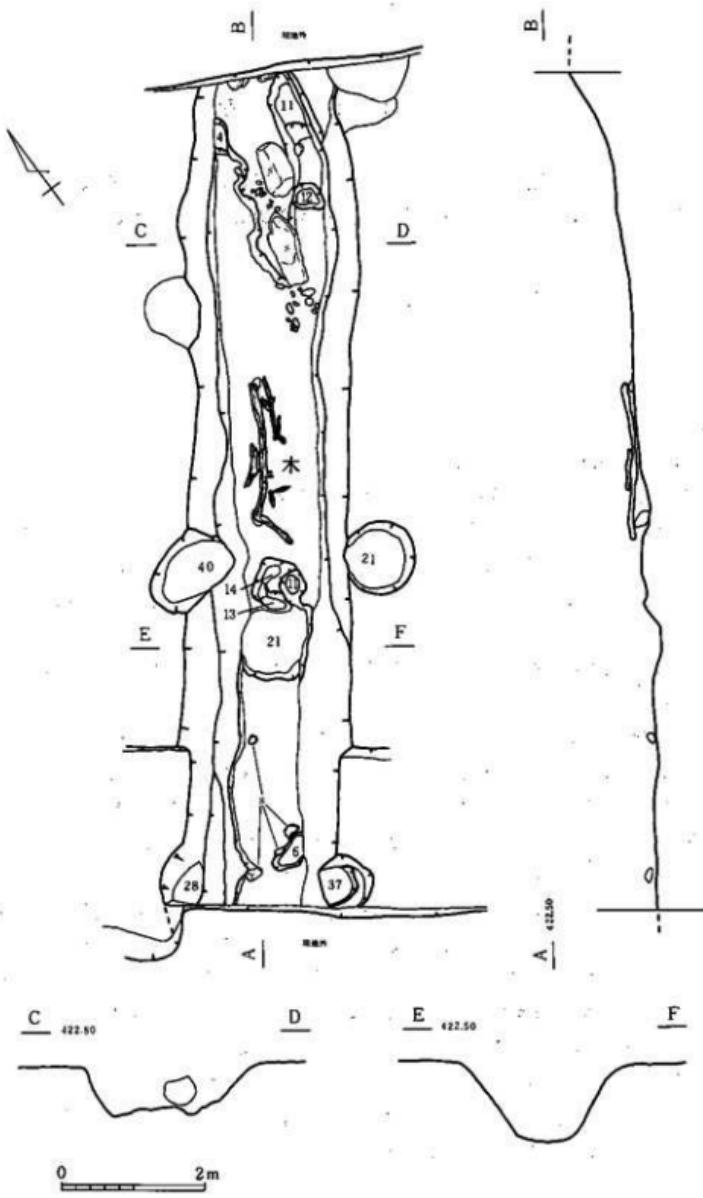
①溝址1（挿図4、第1～6図）

用地を横切って、北西側に検出した。長さ11m余、巾2.3～2m、深さ2～0.3mで方向はN35°Eを測る。底部巾は1.5～0.5mあり、逆台形でしっかりした溝址である。基盤の砂に掘り込まれている為、壁の下部は水流で削られており、急になっている。溝址の覆土には石が入っていて、中層から底部にかけてであり、大は1×0.4m、小は0.1m以下である。底部には木が残っていた。

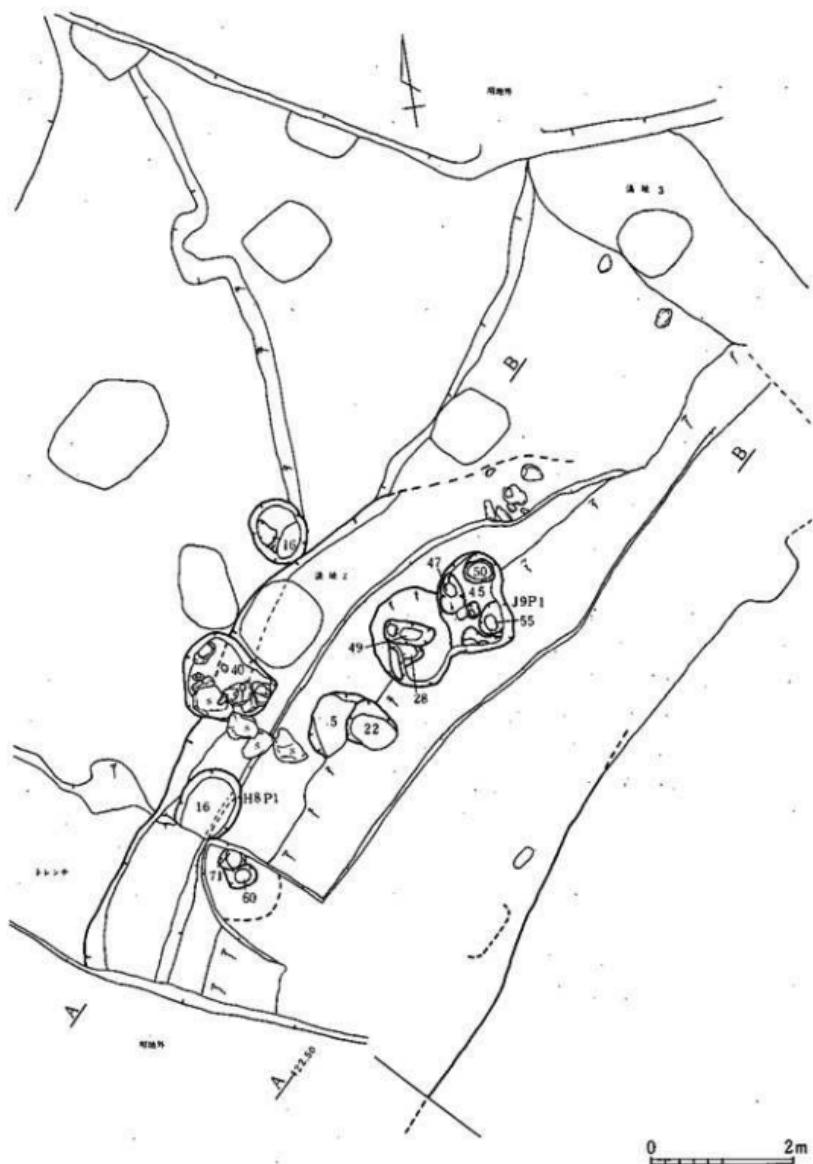
溝址1は、段丘端部にあり、方向は同じ南西に向いている。性格は不明であるが、方向は溝址1を考える上で重要である。

遺物は土器から灰釉陶器片まであり、石器も入っていた。第1図1～4は縄文時代の深鉢片である。拓本をとり掲載したものは、施文のハッキリしたものであり、他にも破片は多数ある。1は口縁片であり、角が付いて切った様になっており、竹管を使った難な檻で波状文を施している。2は深鉢胴部片で、1・2共に中期中葉である。3・4は後晩期の条痕文土器片であり、3は口縁片で上端は角が付いて平らであり、内側に出っぱっている。

5～8は弥生時代の土器片である。5は後期の甕片であり、波状文の下は丸く剥離している。6はやや離れた場所から出土したが、同一個体の甕片である。7は甕の底部で $\frac{1}{4}$ 現存している。8は甕の口縁の拓影でわずか残っている。9～14は古式土器で古墳時代の遺物であり、9は甕か壺の底部、10は器台脚上部で、脚の穴は2段になっている。壺底部との間にあけた穴共に、きれいにきちんとあけられている。11は甕の上部でほぼ $\frac{1}{2}$ 残っており、器壁は薄く外面に隆起で痕が残り石が動いている。内側は隆起の横なのであるが、痕跡はわずかである。12～14は須恵器であり、12は横瓶の口縁で $\frac{1}{4}$ 現存、13は壺で $\frac{1}{4}$ 現存し底部は壘切りである。14は壺の上部で $\frac{1}{8}$ 現存し、高台付壺である。15は内黒の土器で甕と推測した。内側に櫛目がハッキリ残っており特異なもので、外側は難になられ粘土の凹凸がある。16は灰釉陶器の長頸瓶口縁であり、内側は灰釉と自然釉が厚くかかり、外側は灰釉が薄くかかる。17・18は覆土中から出土した鉄滓か鉱滓で



插図 4 溝 址 1



插図5 溝 墓 2 穴

あり、中にガスの穴が大小入っている。19～21は石器であり、19は硬砂岩製の打製石斧片、20はほぼ三角形を呈し横刃形石器で刃部には使用痕が残る。背部には敲打痕が残り、調整痕のみとは考えられず敲打器にも使用したと推定し、硬砂岩製である。21は自然縫で両端に敲打痕が残り塩基性岩製である。第6図8～10は黒曜石、11は玻璃質安山岩である。8は錐、9・10は石核、11は剥片石器である。実測しない小片は多數あるが、中に近世初頭の陶器片が1片あり、溝址1の黒色砂土中から出土している。黒曜石の小片は30余点出土している。

時期は混入遺物から、溝址が最終的に埋没したのは、近世初頭と考えられるが、遺物は古墳時代が多く、古墳時代末から中世の所産と考えられるが詳細時期の特定はできない。

②溝址2（挿図5、第2・6・7図）

溝址1の南東ほぼ5mに検出した、溝址である。長さ7m、巾0.8m、深さ0.7m前後は確認したが、北東端はやや東に曲り、壁が消滅してしまいわからなくなってしまった。水の流れた痕跡は明瞭にはできなかった。方向は溝址1とやや似ておりN40°Eである。覆土には穴や擾乱が入っていた。

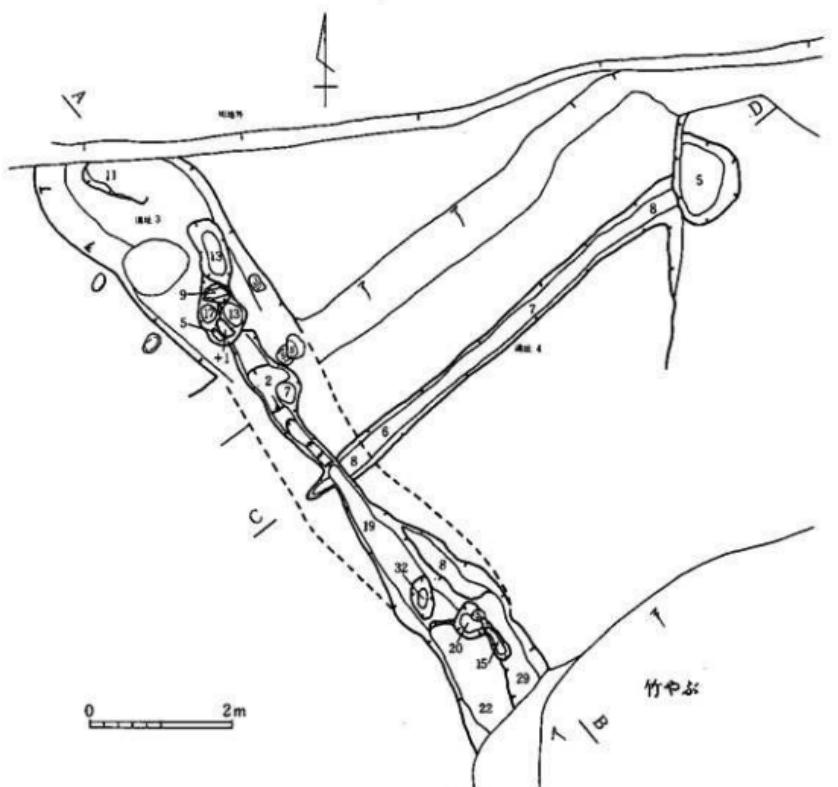
性格は不明であるが、古い水田の水路と推定した。

遺物は、土師器、陶磁器、石器がある。第2図1は、土師器盤の壊部片で稜の部分で破損している。器形の大きさから盤と推定した。約1/8現存し、内側は目立たない笠の横磨き、外側は笠の放射状磨き後、横に少し磨いている。2は中国から渡来の白磁端反り皿であり、端部と底部を欠くが、全体形は把握できる。釉薬は高台の先端半分にかかっていないが、他は乳白色釉がかっている。3は志野釉が厚くかかった茶碗であり、高台は削り出しで作っている。1/5現存しており内側の質乳は赤褐色を呈している。4は古瀬戸の皿で残っている。器壁、底は厚くボッタリしており、全面灰釉がかかるが、見込みは輪状に鉄釉がかかる。高台はハッキリしたものではなく、削り出している。5～9は石器で、5は磨製石斧片6・7は打製石斧の半欠である。6には使用痕が残り、3個共に綠泥岩製である。8・9は横刃形石器で8の刃部には使用痕が残る。第7図1～7は小型石器である。12は石錐で、有舌錐の舌が折れた所を敲打で平滑にし、平根錐としている。13・14第7図1は石核、2～7は剥片石器で使用痕が残っているが、6は石錐の破片かもしれない。第6図13、第7図3は珪岩で他は黒曜石である。実測しないものは多數ある。綠青で砂の付着した2×1cmの青銅製品があるが、腐食が進み実測できなかった。

時期は、混入遺物から中世終末～近世初頭が考えられるが、中世の所産であろう。

③溝址3（挿図6、第2・7図）

溝址2と直交する溝址を検出。3にする。長さ約10m、巾1.5～0.2m、深さ0.2m前後を確認したが、覆土下部に砂と底部に砂の入った穴があり、水が流れている事は確実である。方向はN40°Wを測り、底部は崖錐に向って緩く傾斜している。



插図6 溝 址 3 + 4

性格としては、水路であるが、詳細は不明である。

遺物は、土器、土師器、陶器、鉄滓、石器がある。第2図10は縄文時代の深鉢口唇部片で、半裁竹管による縦の平行沈線が施され、平出Ⅲ類Aの範疇である。11・12は土師器で、前者は壺の口頭部片、後で調整されている。後者は淡褐色を呈し、内側に窓調整がある事から壺であり小型と思われる。13は志野釉のかかった皿で、器壁は厚くボッテリしている。釉薬は内側全面、外側は口縁から胴部半分に、厚くかかっており、釉がたれている。高台は削り出して作っており低い。近世初期の大窯V期の製品であろう。14・15は鉄滓か鉛滓か不明であるが、中にガスの空間があり小型である。第7図8～11は小型剝片で、すべて黒曜石であり、使用痕の残るものもある。実測しなかったものに、須恵器の小片5点があり、壺・壺である。

時期は、混入遺物から溝1・2とはほぼ同時期と考えられ、中世の所産であろう。

④溝址4（挿図6）

溝址3に直交して検出した小溝であるが、溝の底のみ残っていたとも考えられる。長さ6～7m巾0.3m前後、深さ0.1mと小さい。覆土はほとんど砂であり、水が流れている事は確実である。底部は南西側が10cm前後低くなっている。溝址3を越えた所で、確認できなくなったが、溝址3と一緒にになった可能性もある。北東端には直径約1mの穴があり、溝址4に付くものであろう。

溝址の性格は、周囲が古い水田でその溝と推定した。

遺物の出土は無く、時期も不明であるが、他の溝址と同じ中世であろう。

2) 穴等

用地内の一箇所高い部分に、多数の穴を検出し調査したが、途中で擾乱を確認した物もある。途中で確認できた穴は耕作の擾乱で、この用地は水田から果樹（桃から柿）園と替えており、果樹の植穴が多数入っている。挿図の細い線で表わした穴は、擾乱の穴である。

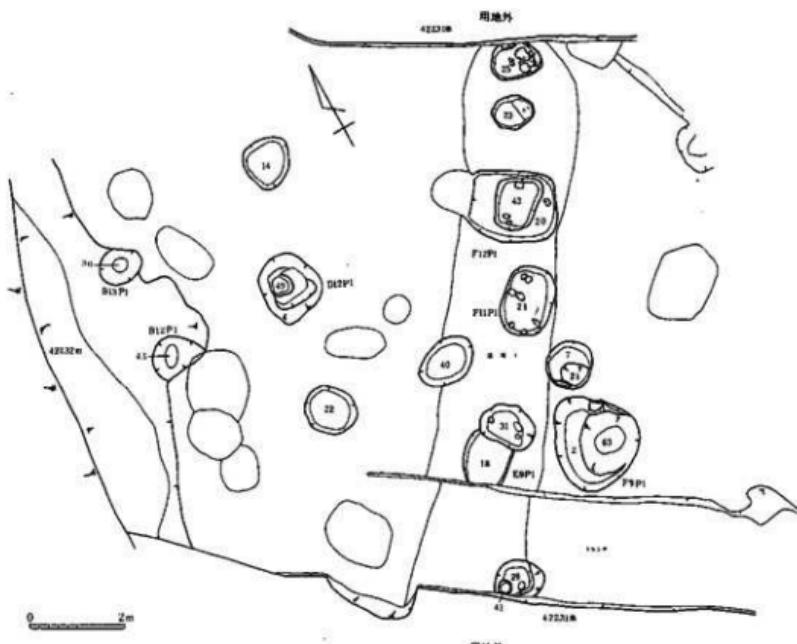
挿図の穴で、横にグリットピットを入れたものは、遺物を図化掲載したものである。しかし遺物は大部分が、混入遺物であろう。擾乱の穴から出土した遺物は遺構外で掲載した。

穴の記述は、遺物を掲載したものにした。

①B12P1（挿図7、第3図）

最終的に自然落ち込みを判断したが、上部に穴がある。比較的小型であるが深い。

遺物は、第3図1・2の拓影で、1は縄文時代中期後半に比定される羽状の竹管文である。2は弥生時代の壺底部片で、拓影の白く曲線になった部分は紐の痕跡で、乾燥台の上に丸くほぼ二重に置いて、滑り止めにしたものであろう。



挿図7 穴等

②B13P1 (挿図7、第3図)

①の穴と同様で、第3図3・4が拓影である。3は縄文時代晚期の小形深鉢片、4は弥生時代後期のS字口縁台付壺の口縁片である。

③D12P1 (挿図7、第3・7図)

①の東約2mに検出した穴であり、底部は2段になっている。遺物は第3図5、第7図12があり、5は鉄軸の陶器で全面に軸がかかる。底部は釉薬の下に回転糸切り痕があり、器種は把握できなかった。12は、黒曜石の剥片石器で使用痕が残る。

④E 9 P 1 (挿図7、第3・7図)

溝址1の覆土に掘った穴で、浅く、底部は平らである。

遺物は第3図6、第7図13があり、6は弥生時代壺の底部で、13は黒曜石の剝片石器で、背部調製の為敲打している。

⑤F 9 P 1 (挿図7、第3図)

④の南東約2mに検出した、大きな穴である。壁は緩く傾斜しており、段が付いている。

遺物は第3図7があり、土師器蓋嗣下部の拓影である。

⑥F 11 P 1 (挿図7、第3・7図)

溝址1の覆土に掘った穴で、深さはやや浅い。覆土中と底部に石が入っていた。

遺物は第3図8～9、第7図14・15があり、他にも土師器片多数と須恵器1片がある。8は弥生時代後期壺の底部で、外側は縦笠磨きがある。9は弥生時代末から古墳時代前期の台付壺片で実測部はほぼ現存している。10は須恵器壺の口縁片である。14は小さな円碟で、全面擦痕が残っているが、何に使用したか不明である。15は黒曜石の剝片石器である。

⑦F 12 P 1 (挿図7、第3・7図)

⑥と同じく、溝址1の覆土に掘った穴で、底部は2段になっている。覆土中と底部には石が少量入っていた。穴はほぼ長方形をし、1.8×1.1mで中の穴は外側に直交する長方形であり、深さは43cmを測る。

遺物は第3図11・12、第7図16・17があり、他に土器、土師器、須恵器、表裏に厚い灰釉のかかった近世陶器の少片が、多数出土している。11は弥生時代の壺と推測したが、壺かもしれない。12の器種は不明であり、材質は緑泥岩である。第7図16・17は黒曜石の剝片石器で、1次敲打痕と使用痕が残る。

⑧H 8 P 1 (挿図5、第3図)

溝址2の覆土中に掘った穴で浅く、梢円形を呈する。

遺物は第3図13があり、他に土師器、須恵器蓋内側にかえりの有る物等少片が出土している。13は弥生時代最末の無文壺であり、胴部外側縦笠磨き、口縁横なで、内側横と斜笠磨きが施されている。

⑨J 9 P 1 (挿図5、第7図)

下段を埋めた所に検出した穴である。底部は平坦でなく、凹みが5個あり、覆土に石が混入していた。形は不整形であるが、深さはある。

遺物は第7図18・19があり、18は黒曜石の自然面を持つ剝片石器で使用痕が残る。19は赤色珪岩のやや大形で器種は不明である。

3) 遺構外出土遺物

表土、基盤の覆土、擾乱の穴等から出土した遺物は、作図・拓本をとったものについて掲載し、土器、土師器等時期の把握できるものは時期別に概要を記した。

①弥生時代（第3・8図）

土器で、弥生時代末までと確認した土器は、第3図16～18で、16は壺の底部、17は波状文の施された壺の肩部、18は無文の壺口頸部である。第8図14は粘板岩製石鐵の末製品で、表裏は研磨されており、整形と穿孔だけになっている。

②古墳時代（第3図）

古墳時代を通じた土師器で、確実なものは少ないが第3図19～22がある。19はS字口縁の拓影20は土師器の壺と推測したが环かもしれない。21は壺の底部で2次焼成を受けている。22は叩き目のある壺か壺で、古墳時代前期の所産である。

③平安時代（第3図）

平安時代に位置づく土師器は、第3図23・24である。23は壺の肩下部で外側にカキ目が残る。24は壺の口縁部で内側にカキ目がありその拓影である。

④中・近世（第4図）

中・近世陶器には、碗・皿・擂鉢等あるが詳細時期確定が困難である。1・2は灰釉のかかった碗であり、1の釉薬は内側全面、外側は高台の中間までと高台の内側にかかり、胎土・焼成は非常に良好である。目込の3カ所に針トチ痕跡が残る。2は釉薬のかかり方は1と同様であるが、高台がやや小さく天目茶碗であろう。3は薄い茶色と灰褐色の釉がかかった碗であり、きちんと整形されている。胎土は淡灰色を呈し、近世末である。4は茶色と黒色のまだらの鉄釉がかかった碗で、外側釉の下は乳白色の露胎である。高台と底は鋸削りで難に調整されており、高台内は薄くロクロは右回転である。見込に針トチの痕跡が残る。5は鉄絵の残る皿で、詳細時期は不明である。茶色を呈する鉄絵の上に黄白色の釉薬がかかり見込に針トチの痕跡が残り、高台は削り出してある。6は中国産の青磁皿で、淡褐緑釉がかかり、内外に段が付く。時期は古く古代に入るかもしれない。7・8・9は擂鉢片で、7は肩下部8は肩9は底部で、すべて使用痕が著しく櫛目が半分位い磨滅している。第6図7は非常に小さな陶器片で、外側には黄白色の灰釉がかかり、底部は回転糸切りで、玩具の1種であろう。

4) 時期不明遺構外遺物

① 鉄製品・鉄滓・鉱滓（第4、8図）

鉄製品は第4図10の他に、小さなものには多数あるが、すべて錆が付着している。10は大きな釘か、茎と推測され長方形を呈する。11～14は鉄滓であり、11は緩く湾曲している。12は不整3角形を呈し錆が少なく、11・12は200g丁度である。13・14は不整形で錆が多く、前者は145g、後者は55gである。第8図15は鉱滓で周囲に石が付着し、中央にはガスの入っていた穴があり軽い。外面の所々に、光沢のある滑らかな部分がある。

② 石器（第5・6・7・8図）

遺構外から出土した石器は多数あるが、掲載したものについて記す。第5図1は磨製石斧の末整形片、2・3は打製石斧片で2には使用痕が残る。4～7は横刃形石器で、使用痕の残るものもある。8・9は砥石であり、前者は緑泥岩の転石で表裏に使用痕が残る。後者は硬砂岩で粒子の細かいものと、荒いものが互層になり左側は切断してある。10と第6図1～5は敲打器で、10は表裏に擦痕も残り砥石にも使っている。第6図2・5は使用痕が著しく残り、4は目立った使用痕も無く編物石かもしれない。第7図20～22・第8図1～13は小石器で、比較的大きく実測したものを掲載した。第7図20は有茎石錐の完形で、きれいに剥離している。

③ 金属製品（第6・8図）

第6図6は、攪乱の穴から出土した和鏡である。径4.7cm・厚さ2.5cmで、1.1～1.7mmの縁が付き中央には4×3mmの紐があり、その回りを16花弁の菊花文で飾る。紐は穴が鑄だしてあると思われるが、錆があり確認してはいない。全体的に保存状態は良好で、裏面の菊花文もはっきりしている。

時期の把握はできないが、鏡の形態の流に大きく仿製鏡→和鏡→柄鏡があり、和鏡の範ちゅうに入るるものである。とすれば平安時代から、柄鏡の盛行する江戸時代までとする事ができる。

第8図16は渡来鏡で、文字は不鮮明であるが紹聖元宝と読め、2次焼成を受け赤褐色を呈している。

IV まとめ

今回発掘調査が実施された地区は、恒川遺跡群の東南端部で段丘端に位置し、調査区の南に接して白山古墳がある。道路建設用地の平坦部分を全面調査し、遺構としては中世以後、遺物は主に溝址の流れ込みではあるが、縄文中期以後を確認したので、段丘端部のごく一部の実態に過ぎないが、それらのいくつかを整理しまとめとする。また、調査区の微地形と遺構との関連も考えてみたい。

調査区の微地形は、東南側が段丘崖、南西と西側は恒川清水を源とする小沢に切られて、舌状台地に突出し先端部が白山古墳である。北西から東の段丘端まで地続で、調査区から除々に比高をあげ、恒川B・阿弥陀壇外・新屋敷各遺跡と同レベルに達する。表土は灰黒色土が20~30cm位いで、下は基盤と同じ砂になり、色が異なるだけである。

縄文時代の遺構は検出されなかったが、遺物は比較的多く出土した。出土は溝址がやや多いが、造構外にもある。縄文時代の遺構は、段丘端部近くに分布すると推測されるが、当調査はあまりにも崖縁に近過ぎるのであろう。

弥生時代の遺構も検出されなかったが、出土遺物の破損状態は、縄文時代より大きな破片であり、溝址から出土したものも流れて来た様子は見えず、推測であるが当調査区は古く削平されており、遺構の存在したこととも考えられる。

古墳時代の遺構は、今回の調査で検出されると予想していたが、確認できたものはない。すぐ南隣が白山古墳で、形態等確認できると思っていたが、把握できなかった。

白山古墳は円墳という事になっており、調査区より1.5mくらい高く、台地先端部を切った形態で、周溝の存在が考えられた。遺物はすべて破片であるが、多種類の個体が出土した。

中~近世の遺構は、当時期に比定した溝址4本と穴である。溝址1、2、4は、段丘崖に平行しており、2以外は水の流れた痕跡があり、水田等の用水であり、2は何らかの遺構に伴なう溝であろう。溝址3は段丘崖に直交し、崖縁に排水する溝であろう。

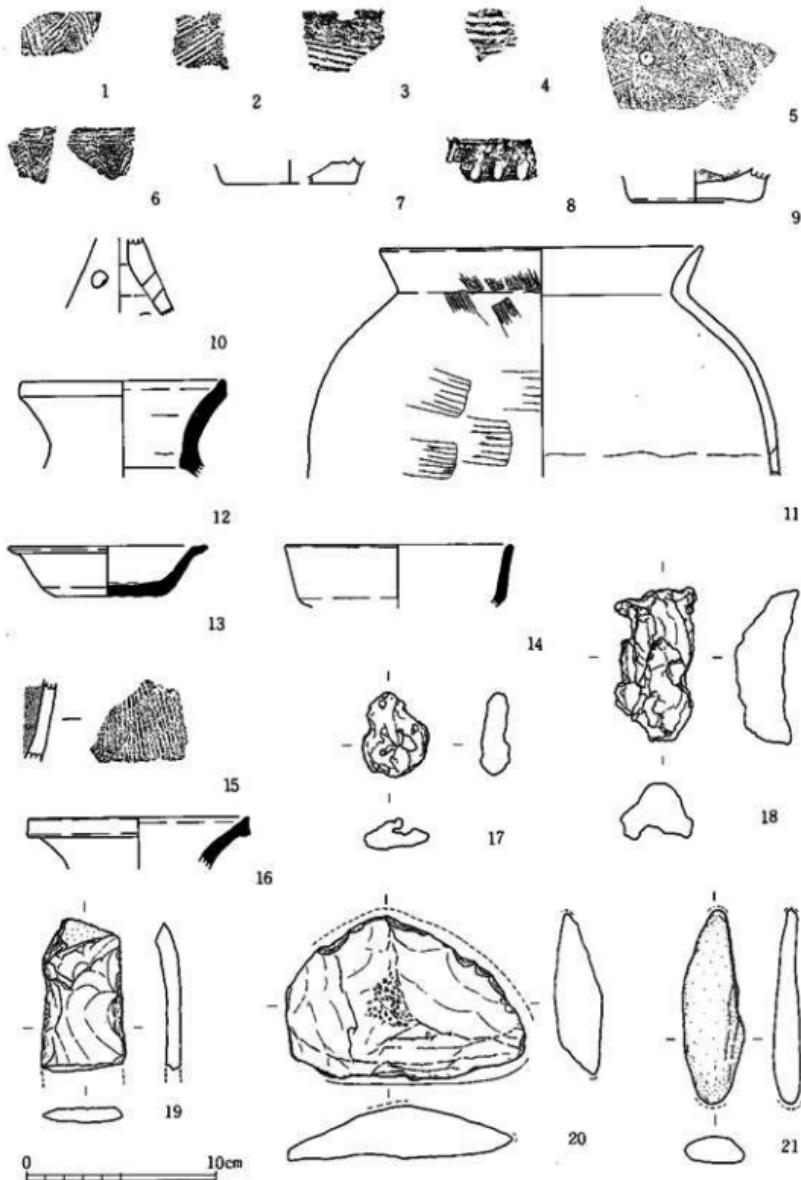
遺物は、和鏡が特筆されるべきものである。出土したのは調査区ほぼ中央で柿の肥料をやった擾乱穴であるが、この位置の表土にあったものであろう。小型で表の鏡は少なく、状態は非常に良好であり、表面の菊花文も鏽くずれも無く、表を磨けば使用も可能である。柄鏡の盛行以前の頃と思われ、平安時代から中世の所産であり、付近の豪族の婦人が所持していたものであろう。

出土した陶・磁器は量が少ないが、古瀬戸灰釉の碗・皿・鉄絵の皿等良質の物があり、摺鉢は良く使用されている。磁器は溝址2から白磁の反端皿と、造構外から青磁段皿片が出土しており良質で、一般民衆の所持できる品ではない。

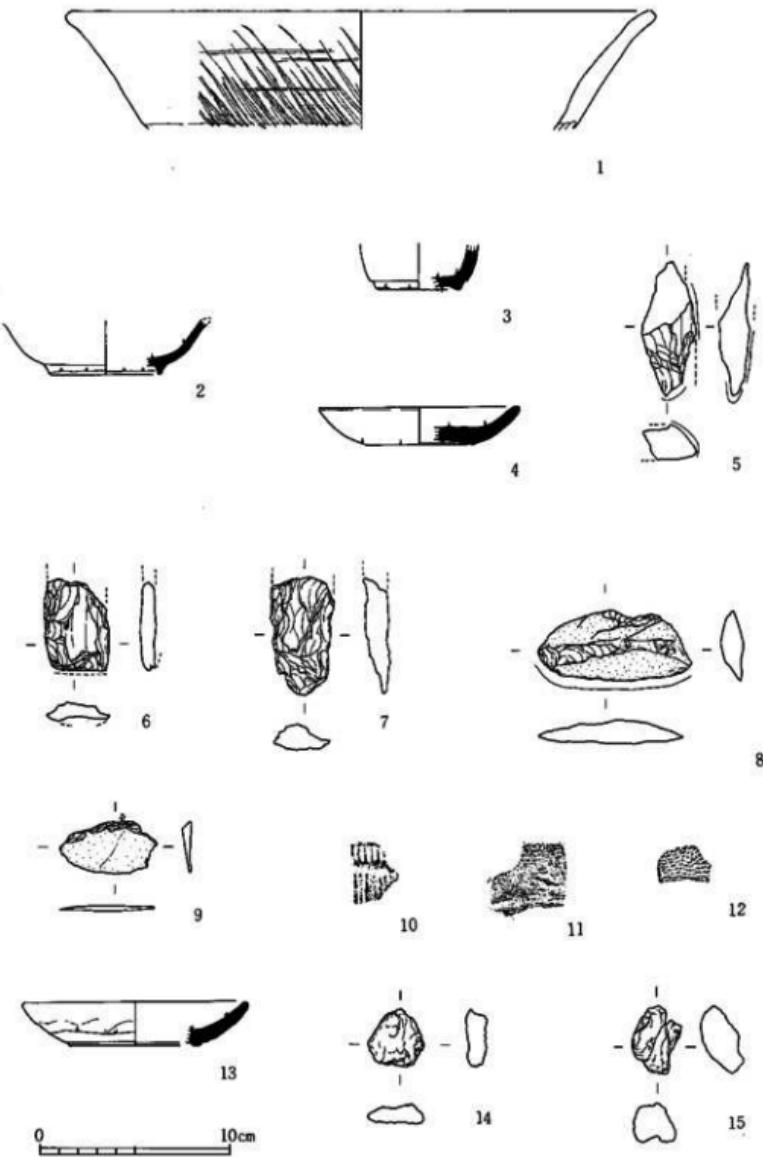
以上の、今回の調査結果から、時代別に若干のまとめをしたが、恒川遺跡群の東南端で、隣接して古墳があり、何か特殊な遺構が検出されることを推測したが、あまりに段丘崖に近すぎるの

であろう。古墳に接しており、中世の遺物が出土し、遺跡の中心では無かったが、恒川遺跡群の一角でありある程度の位置づけができた事は、大きな役割を果すものといえる。

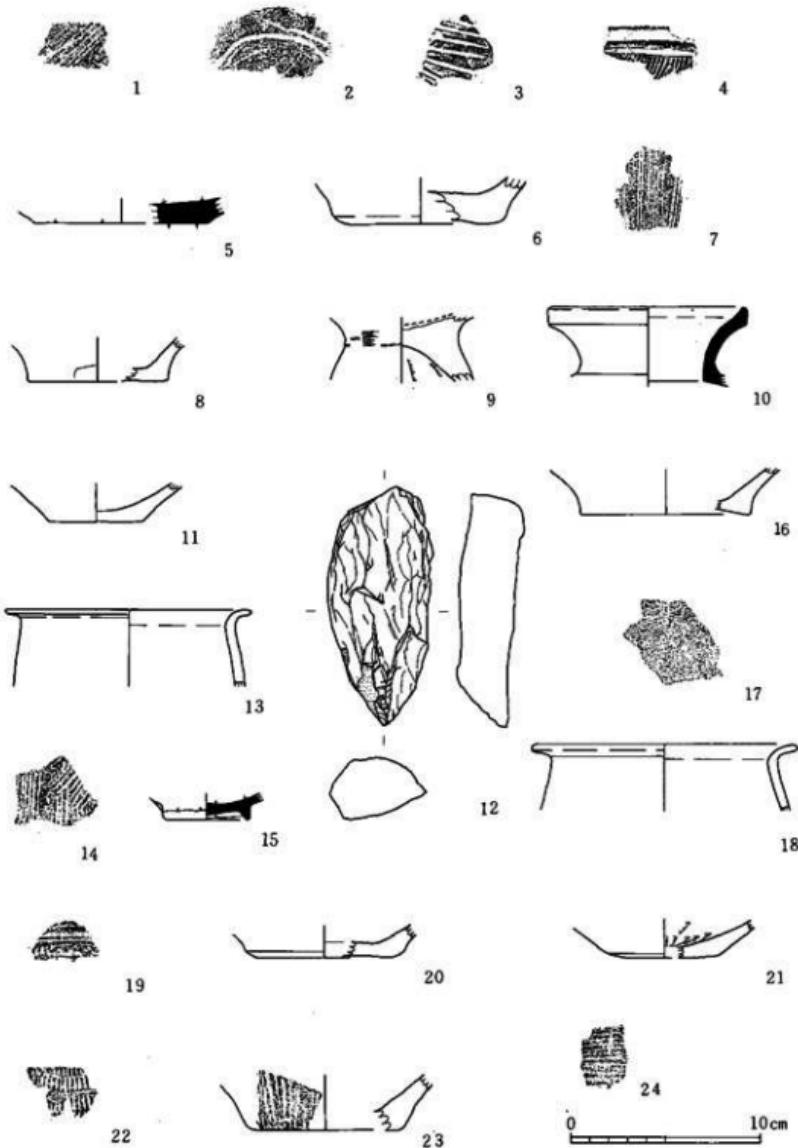
図 版



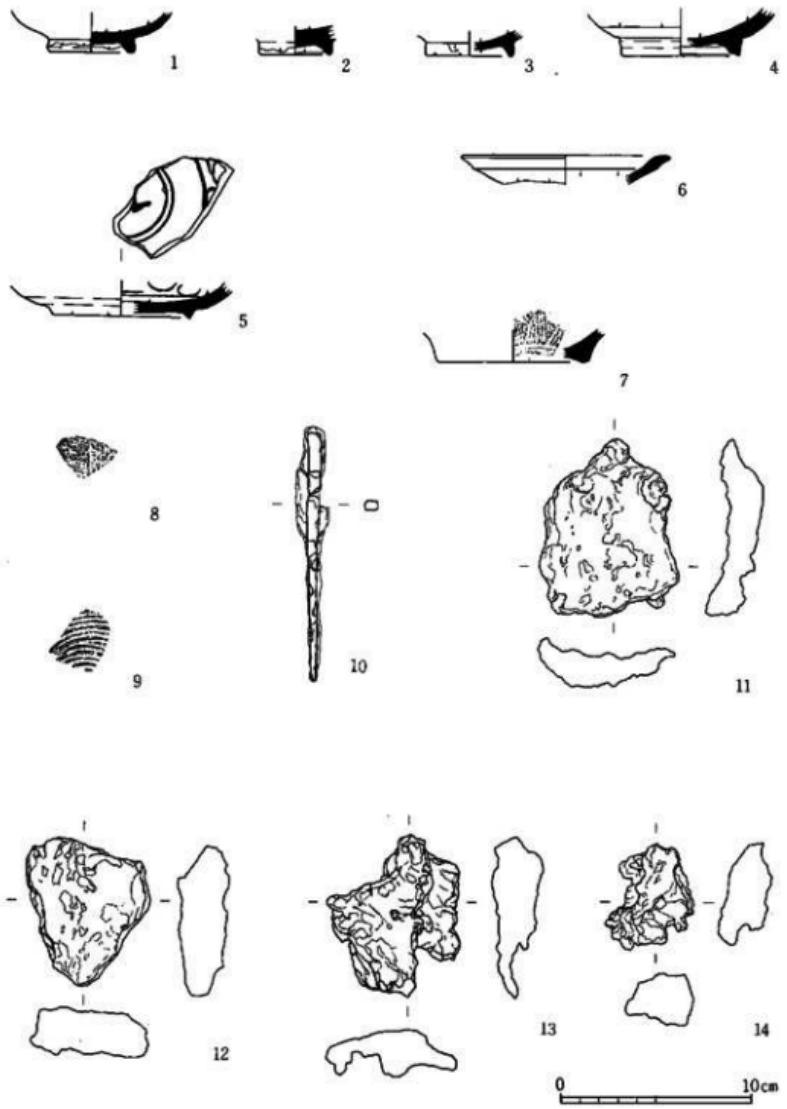
第1図 溝址1出土遺物



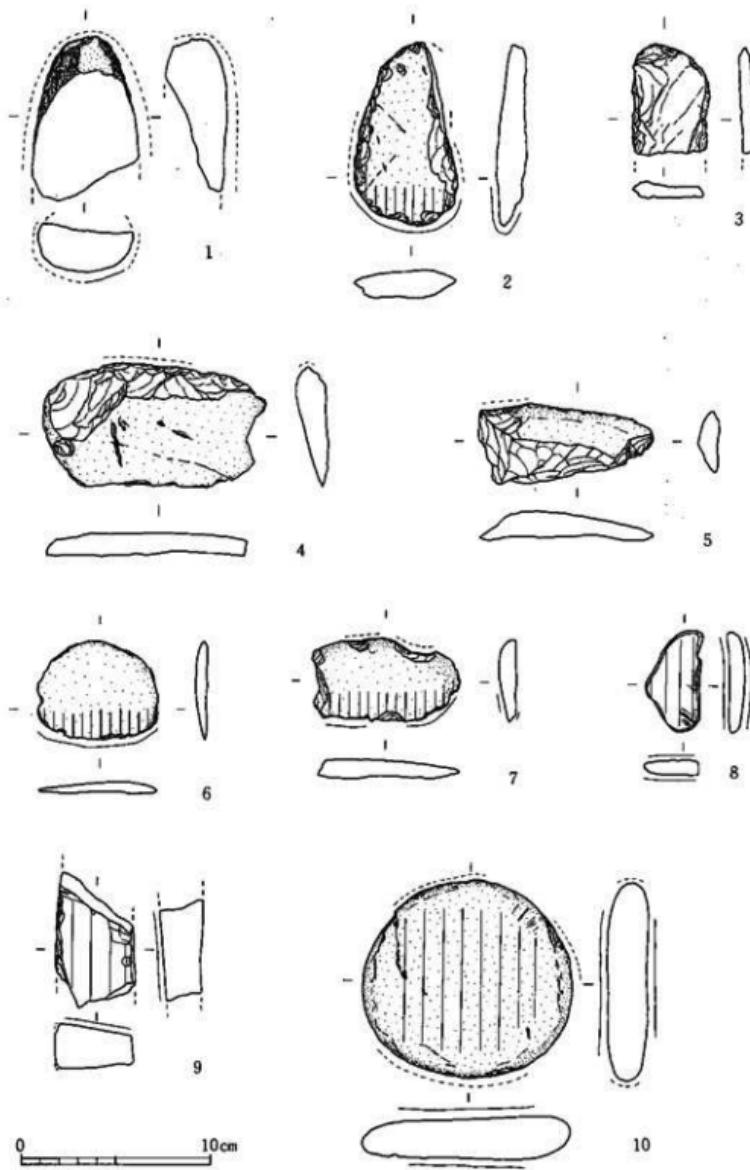
第2図 溝址2・3出土遺物(溝址2、1~9・溝址3、10~15)



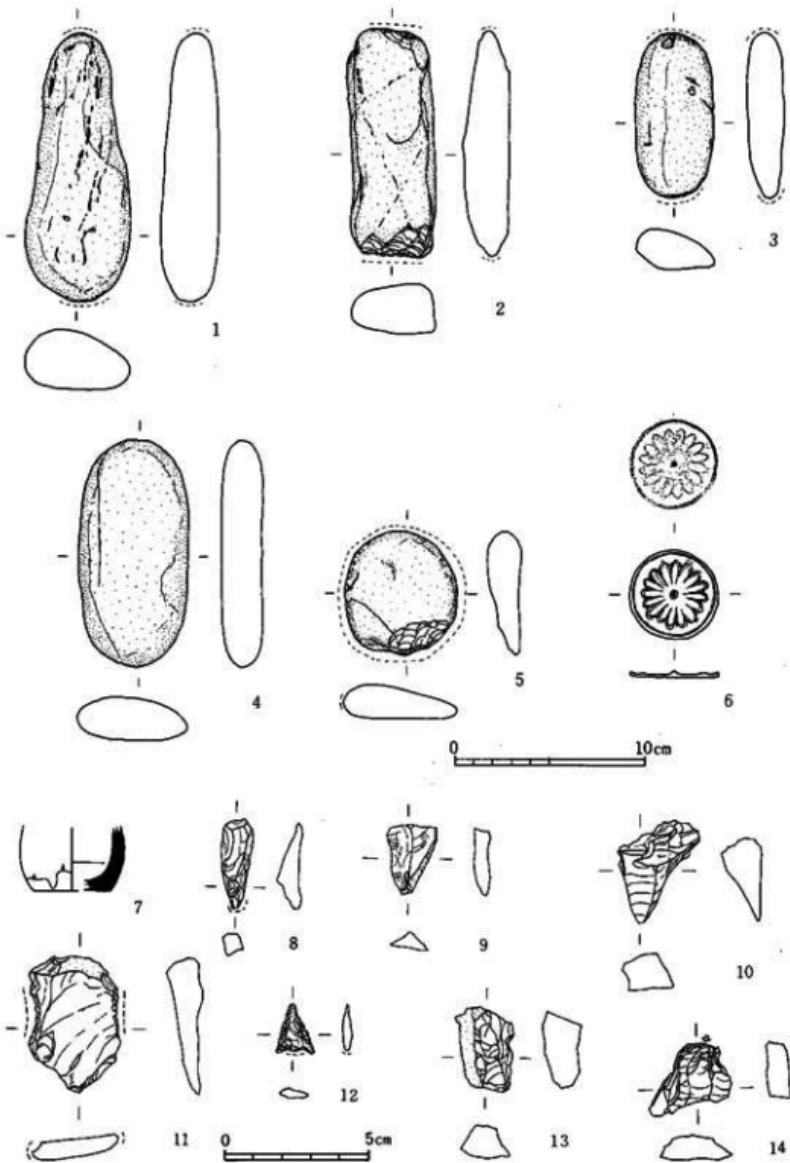
第3図 穴・造模外出土遺物（穴1～15・造模外16～24）



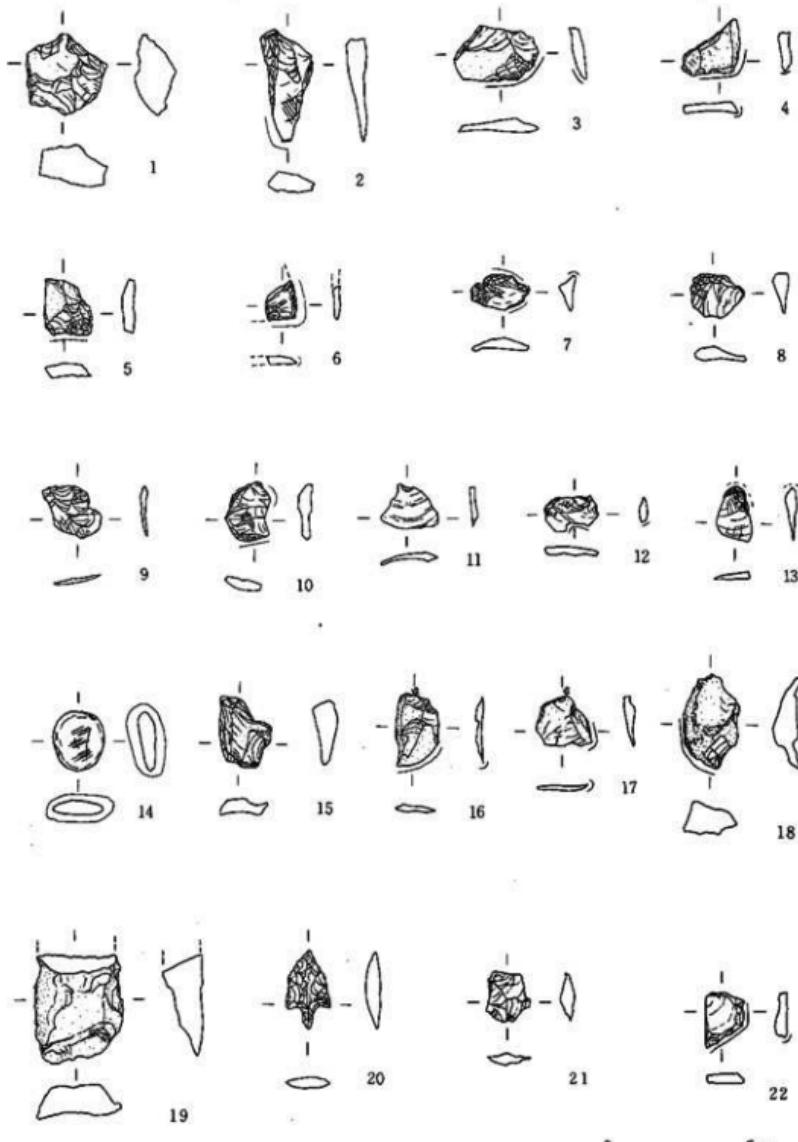
第4図 造構外出土遺物



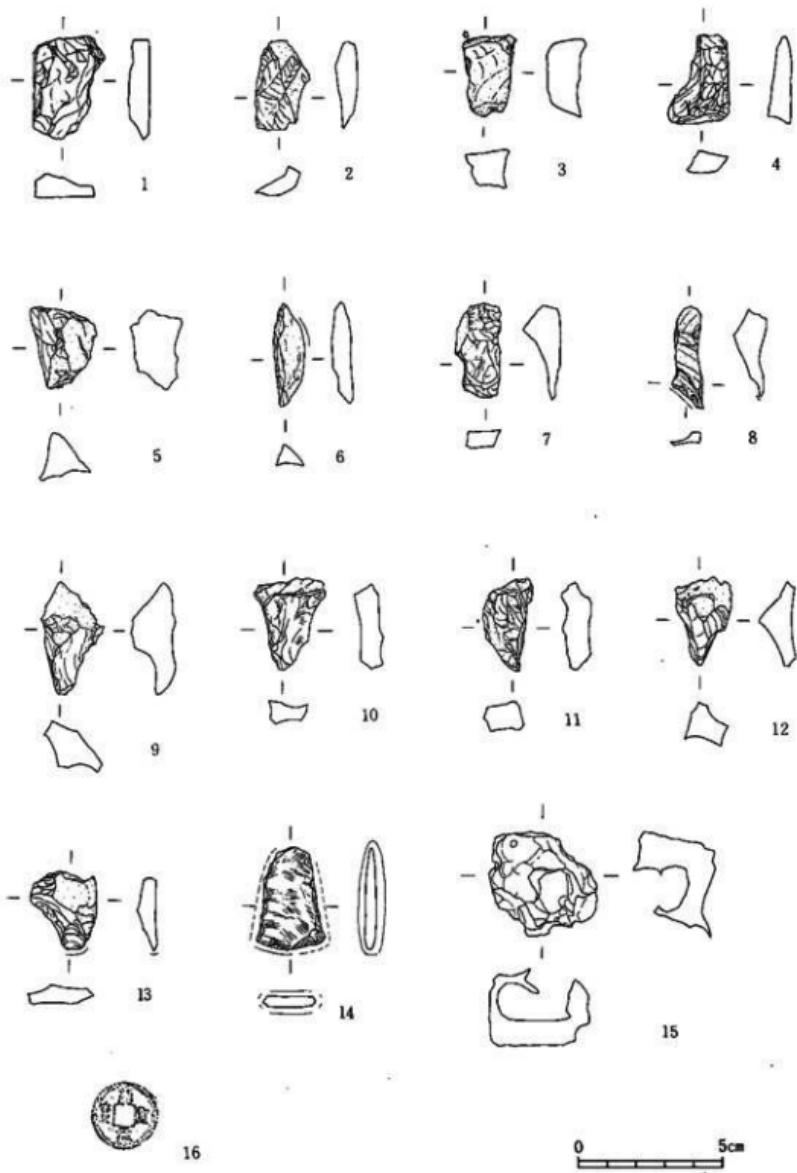
第5図 造構外出土石器



第6図 溝址1・2・遺構外出土遺物（溝址1、8～11・溝址2、12～14・他は遺構外）



第7図 溝址2・3・穴・遺構外出土石器（溝址2、1～7・溝址3、8～11・穴12～19・遺構外20～22）



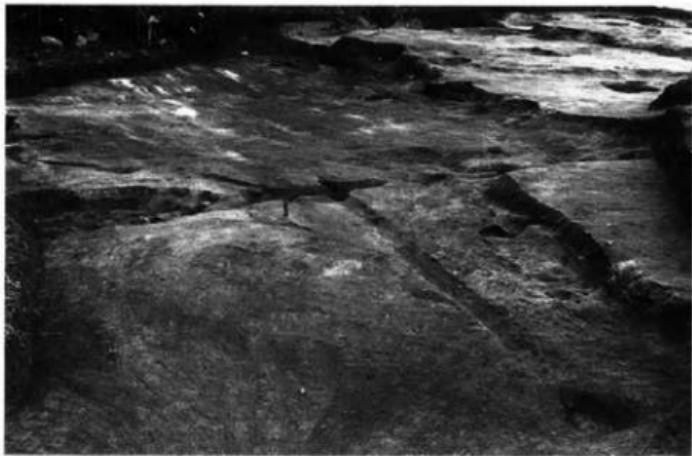
第8図 造構外出土遺物

写 真 図 版

図版 1



造構全体 北から



造構全体 東から

溝 址 1



南西土層



北東から

溝 址 2

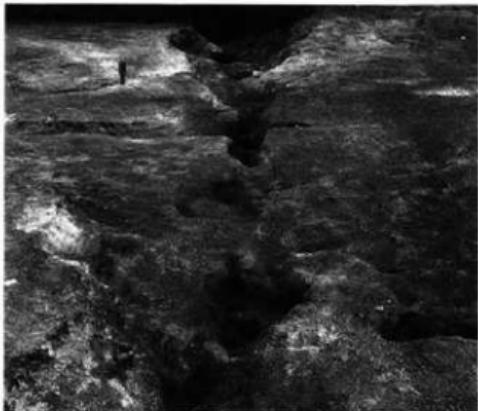


南西から



検出 北から

図版 3

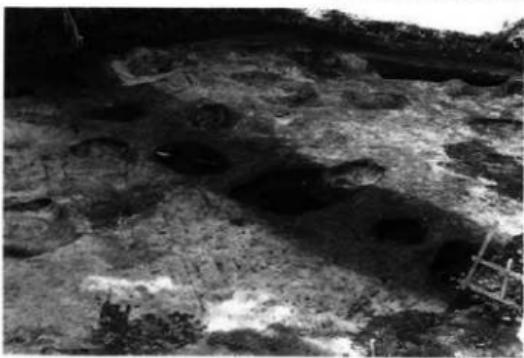


溝址 3
北西から

溝址 4
北東から



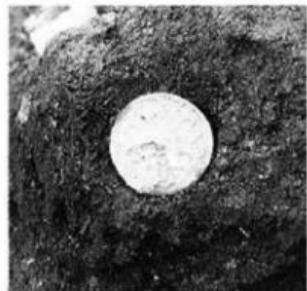
溝址 1
覆土の穴掘上げ



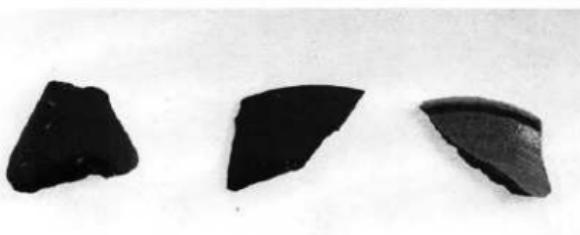


F 11 P 1

遗物出土状态

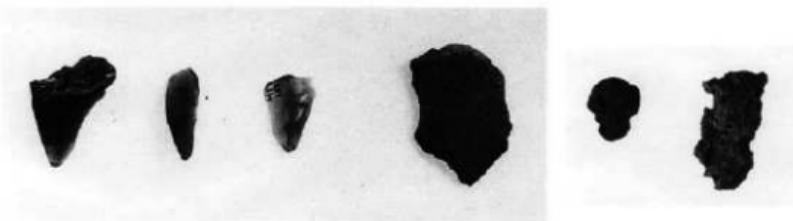


溝 槽 外

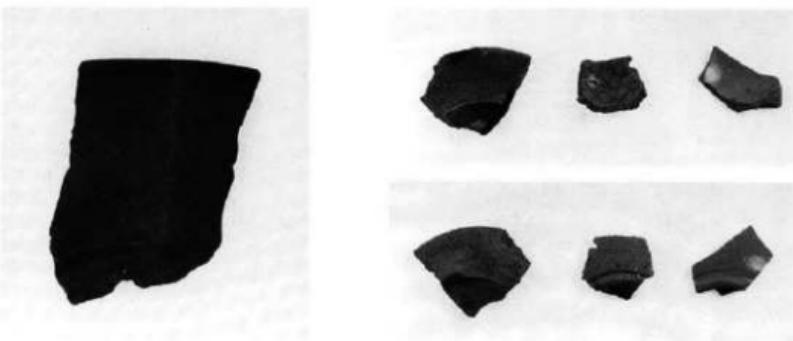


溝 址 1
出土 遺物

图版 5



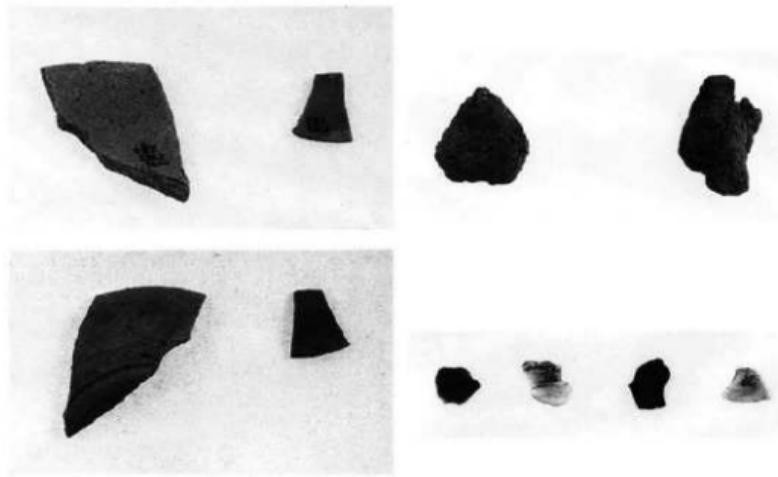
溝址 1 出土 遺物



上 内側 下 外側



溝址 2 出土 遺物



上 内側 下 外側

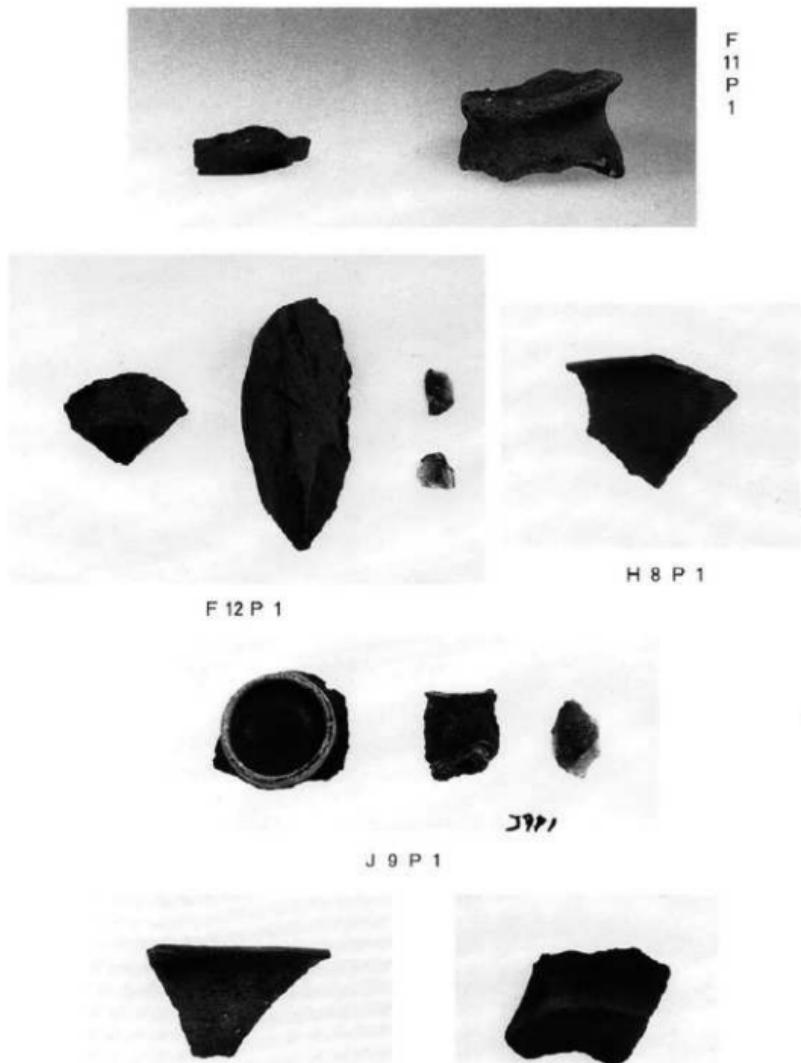
溝址 3 出土遺物



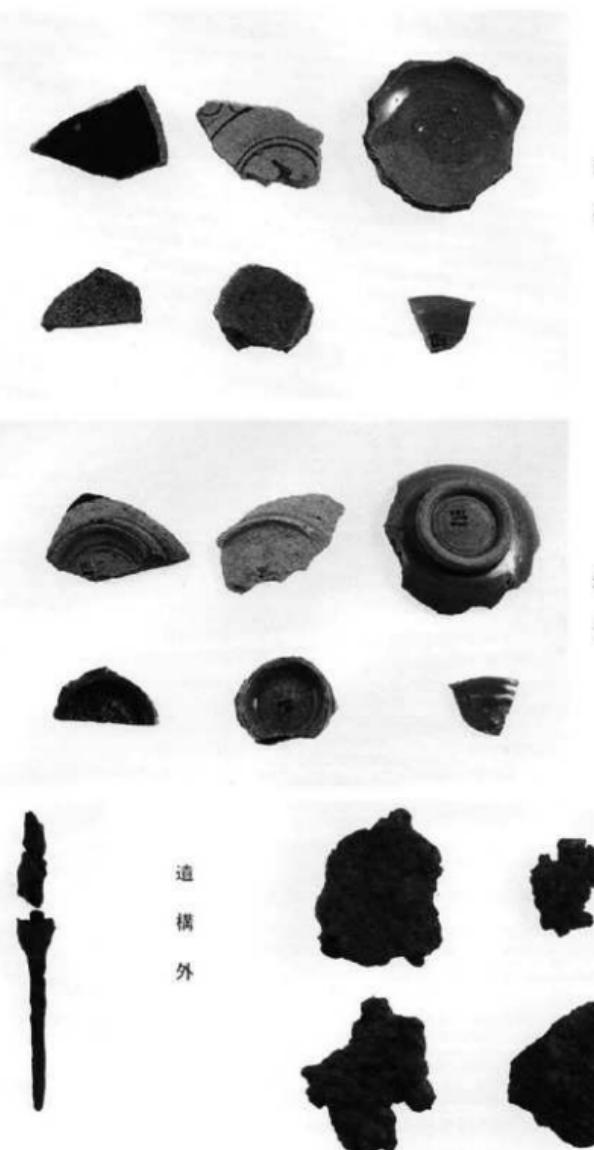
F
11
P
1



図版7



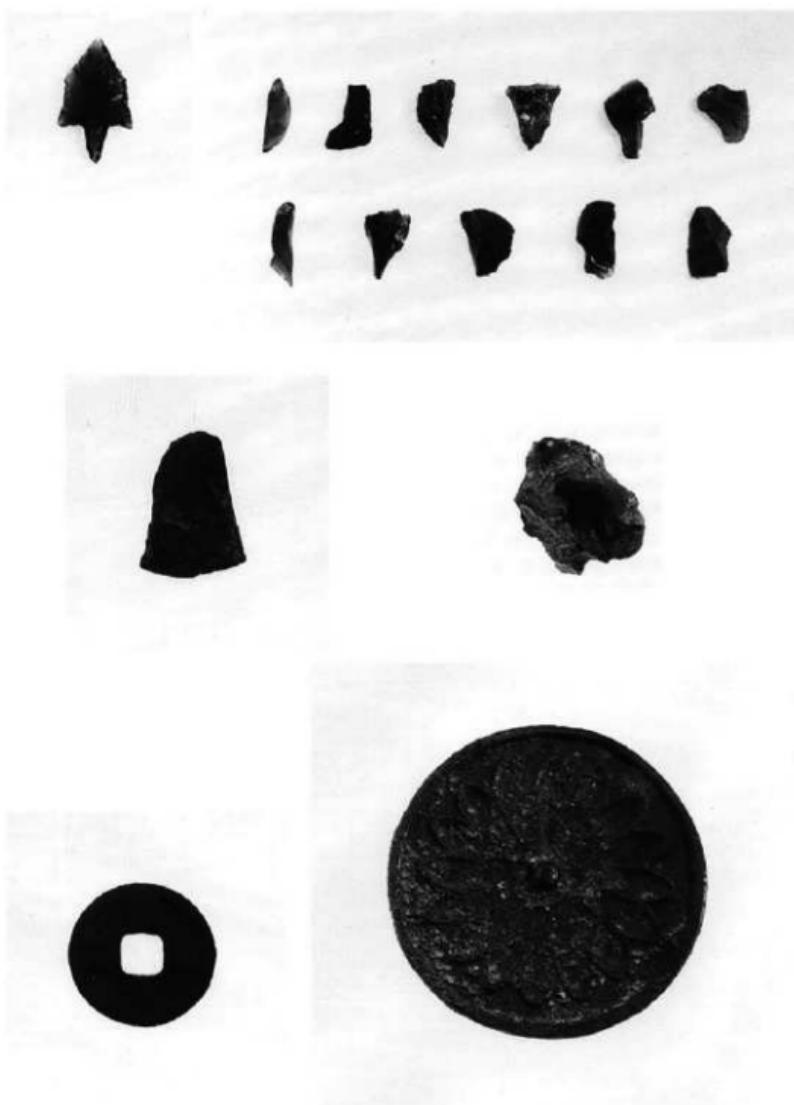
造構外





遺構外





遺構外

図版11



作業スナップ

飯田市座光寺下段整備事業農道新設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

恒川遺跡群
白山遺跡

平成4年3月31日 印刷

平成4年3月31日 発行

編集 長野県飯田市大久保町2534番地

・発行 長野県飯田市教育委員会

印刷所 ヨシザワ印刷株式会社

